

中学生・高校生の社会的態度に関する 縦断的研究 (I)*

久世敏雄 後藤宗理 二宮克美¹⁾
宮沢秀次¹⁾ 池田博和 伊藤義美²⁾
浅野敬子³⁾

I 問題

われわれは、「中学生・高校生の社会的態度に関する研究」と題した一連の研究(久世ほか, 1974, 1975, 1977, 1978)で, 中学生や高校生の社会的態度がどのように形成され, 変容されていくのかを検討してきた。そこでは, 社会的態度は, 保守的, 革新的, 大衆社会的態度の3つの側面から捉えられると考え, 次の4つの主なる結果を報告してきた。①中学生・高校生の社会的態度は, ほとんど変化がみられず安定している。②いずれの学年においても, 革新的態度得点が最も高い。③大衆社会的態度得点は, 学年の進むにつれて高くなる傾向がある。④保守的態度と大衆社会的態度との間には, 正の相関が認められる。

今回, 中学1年から高校Ⅲ年までの6年間の縦断的データが, 昭和47年度から昭和52年度および昭和48年度から昭和53年度の2学年分蓄積されたので, それらのデータを用いて6年間の社会的態度の変化の様相を検討する。また, それぞれの態度得点について, 6年間の変化を被調査者ごとに検討するための予備的段階として, 各態度得点に基づく被調査者のグループ化を試みる。

II 方法

1. 社会的態度測定の問題紙

社会的態度測定の問題紙(付表)は, 保守的, 革新的および大衆社会的態度として用意されたそれぞれ13項目

計39項目の質問から構成されており, 非常に賛成, 賛成, 賛成とも反対ともいえない, 反対, 非常に反対の5点尺度で評定を求めた。そして, 被調査者の各項目の反応に対して, 非常に賛成の場合5点, 賛成の場合4点, 賛成とも反対ともいえない場合3点, 反対の場合2点, 非常に反対の場合1点を与え, 3つの社会的態度ごとに合計値を算出した。以下, 態度得点という場合はこの合計値をさし, 数値が大きいほどその態度が強いことを意味する。

2. 調査対象および調査時期

被調査者は, 名古屋大学教育学部附属中学校および高等学校の生徒である。今回の分析の対象は, 昭和47年度から昭和52年度および昭和48年度から昭和53年度にかけて中学1年から高校Ⅲ年までの6年間引き続いて在籍し, 毎年この調査をもれなく受けた男女生徒94名(男子50名, 女子44名)である。

調査は各年度の12月から1月の間に, クラスごとに集団で実施された。

III 結果

中学生・高校生の社会的態度の6年間の変化の様相を明らかにするために, まず6年間の縦断的データに基づく全般的な分析を行なった。次に, 6年間の変化を被調査者ごとに検討する予備的段階として, 6年間の3つの社会的態度得点に基づいて, 被調査者をグループ化するためにQモードクラスター分析を行なった。以下, その結果を順次述べることにする。

1. 縦断的データの全般的分析

(1) 態度得点の平均値の変動

各態度の合計値を算出し, 男女別学年別の平均値と標準偏差を表1に示した。3つの態度得点を比較してみる

* 本研究の資料分析のための計算は, 名古屋大学大型計算機センターFACOM 230-75によった。

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)教育心理学専攻
- 2) 名古屋大学教養部
- 3) 中京女子大学

表1 6年間の各社会的態度得点の平均値と標準偏差

性別	社会的態度	平均・標準偏差	学年					
			中1	中2	中3	高I	高II	高III
男子	保守的	M	36.48	35.12	35.18	36.00	35.64	36.40
		SD	4.16	5.24	4.17	4.68	4.87	5.11
	革新的	M	47.90	46.88	46.46	46.58	46.84	46.62
		SD	3.78	4.72	4.58	4.75	5.25	4.83
	大衆社会的	M	32.46	33.78	34.58	34.82	34.76	34.98
		SD	5.28	6.02	5.65	6.22	5.94	6.55
女子	保守的	M	36.23	34.80	34.20	33.75	34.93	34.82
		SD	5.60	5.16	4.98	5.11	5.19	5.55
	革新的	M	46.70	46.48	45.68	45.16	45.39	45.73
		SD	3.91	4.59	5.05	4.63	4.65	3.56
	大衆社会的	M	33.43	33.59	34.34	35.50	35.27	35.95
		SD	5.93	4.82	5.66	6.26	5.80	6.48

と、男女ともにいずれの学年でも、革新的態度得点が他の2つの態度得点に比べて高いことがわかる。

男女間の各態度得点の比較をしたところ、高校I年での保守的態度得点に差が見られた($P < .05$)ものの、それ以外有意となる差はなかった。このことから、全般に男女ともほぼ同じ値を得ており、いずれの学年でも各社会的態度に男女差はないと言える。

さて、男女別の各社会的態度の6年間の変化を見てみよう。

保守的態度において、男子では、中学1年から高校III年まで全く差は見られなかった。女子では、中学I年が中学3年、高校I年より有意に得点が高かった(それぞれ $P < .05$, $P < .01$)。しかし、中学2年から高校III年までの得点には差が見られなかった。以上のことから、保守的態度はあまり変化がなく、安定した態度と考えられる。

革新的態度において、男子では、中学1年に比べ高校I年の方が有意に得点が低かった($P < .05$)。女子では、中学2年に比べ高校I年の方が得点が低かった($P < .05$)。革新的態度は、男女ともに中学1年から中学3年にかけて得点が減少し、その後高校III年まで比較的安定していることが表1からうかがわれる。

大衆社会的態度において、男子では、中学1年に比べ

中学3年、高校I年、II年およびIII年の方が有意に得点が高かった(すべて $P < .05$)。女子では、中学1年より高校I年、II年およびIII年の方が得点が高く(それぞれ $P < .05$, $P < .05$, $P < .01$)、中学2年より高校I年、II年およびIII年の方が得点が高かった(それぞれ $P < .05$, $P < .05$, $P < .01$)。さらに、中学3年に比べ高校III年の方が得点が高かった($P < .05$)。このように、男子では、中学1年から中学3年にかけて得点が増加し、その後高校III年まで得点が比較的安定している。女子では、中学1年から高校III年にかけて得点が増加し続けている。以上のことから、大衆社会的態度は、学年の進むにつれて、その傾向が強くなっていくと言える。

(2) 態度内相関とその変動

社会的態度がどのぐらい一貫しているのかを見るために、各態度の6年間の時点間相関係数を算出した(表2)。男子では、大衆社会的態度で6年間を通しほとんどの相関が有意である。保守的態度と革新的態度では、すべての相関が有意となるのは中学3年以降である。一方女子では、革新的態度で中学1年と高校I年との間の相関が有意でなかった以外、6年間を通してすべての相関が有意であった。

このことから、男子では大衆社会的態度は一貫しているが、保守的態度と革新的態度はともに中学3年から一

貫し始めるようである。女子では、各態度とも中学1年から高校Ⅲ年までの6年間かなり一貫していると考えられる。

(3) 態度間相関とその変動

3つの態度間の関係を見るために、各態度間の相関係数を男女別学年別に算出した(表3)。全般的にみて、保

守的態度と革新的態度、革新的態度と大衆社会的態度は負の相関関係を、保守的態度と大衆社会的態度は正の相関関係を示している。

保守的態度と革新的態度の相関について、男子では中学3年から高校Ⅲ年にかけて、女子では中学2年から高校Ⅲ年にかけて、負の相関が有意となっている。これは、

表2 各社会的態度内の6年間の相関

社会的態度	学年	中 1	中 2	中 3	高 I	高 II	高 III
保 守 的	中 1		.584***	.455**	.519***	.428**	.453**
	中 2	.426**		.758***	.729***	.589***	.428**
	中 3	.182	.411**		.663***	.518***	.456**
	高 I	.212	.250	.575***		.723***	.690***
	高 II	.132	.203	.561***	.703***		.768***
	高 III	.145	.175	.598***	.671***	.738***	
革 新 的	中 1		.543***	.300*	.212	.453**	.419**
	中 2	.354*		.635***	.598***	.469**	.338*
	中 3	.294*	.121		.620***	.529***	.447**
	高 I	.438**	.392**	.682***		.466**	.563***
	高 II	.257	.267	.652***	.652***		.732***
	高 III	.335*	.085	.527***	.423**	.530***	
大 衆 社 会 的	中 1		.626***	.704***	.620***	.636***	.581***
	中 2	.476***		.779***	.669***	.705***	.645***
	中 3	.309*	.596***		.762***	.704***	.702***
	高 I	.361**	.603***	.616***		.801***	.827***
	高 II	.422**	.709***	.726***	.620***		.806***
	高 III	.201	.506***	.492***	.546***	.655***	

斜線下段は男子、上段は女子の相関である。表中*印は、相関係数の有意性が $P < .05$ 、**印は $P < .01$ 、***印は $P < .001$ であることを示す。*、**、***印については、以下の表においても同様である。

表3 各社会的態度間の6年間の相関

性別	社会的態度	学年					
		中 1	中 2	中 3	高 I	高 II	高 III
男 子	保 守 的 - 革 新 的	-.155	-.207	-.325*	-.320*	-.331*	-.379**
	革 新 的 - 大 衆 社 会 的	-.288*	-.113	-.079	-.105	.101	-.127
	大 衆 社 会 的 - 保 守 的	.237	.111	.291*	.154	.244	.486***
女 子	保 守 的 - 革 新 的	-.178	-.584***	-.518***	-.503***	-.344*	-.340*
	革 新 的 - 大 衆 社 会 的	.035	-.389**	-.152	-.313*	-.206	-.274
	大 衆 社 会 的 - 保 守 的	.217	.341*	.433*	.485***	.688***	.704***

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究(I)

この2つの態度が相反するものと考えられている一つの指標であると思われる。

大衆社会的態度と保守的態度の相関について、男子では中学3年と高校Ⅲ年の2つの時点で正の相関が有意である。一方、女子では中学2年から高校Ⅲ年にかけて正の相関が有意となっており、学年の進むにつれて、その関連が強くなっている。このことから、大衆社会的態度と保守的態度とは関連が深い、それは女子において顕著であると言える。

3つの態度間の相関の変動を見てみると、特に女子では、中学1年の3つの態度間相関はすべて有意でないが、中学2年以降かなりの数の相関が有意となっている。これは、中学1年では3つの態度が独立で構造化されていないが、その後3つの態度間にある構造化がなされてい

くことを推測させる。特に、保守的態度と革新的態度が相反した内容のもの、大衆社会的態度と保守的態度が類似した内容のものとして捉えられるような態度間の構造化が進むものと考えられる。男子では、女子ほどはっきりしていないが、中学3年以降同様の傾向がうかがわれる。

(4) 各態度得点の年間変動量

各社会的態度ごとに、各時点間の態度得点の差の絶対値を変動量とした。表4、表5に、となり合った時点間の変動量の平均値と標準偏差ならびに変動量の分布を示した。男女とも、すべての態度で変動量の平均は5.0以下であり、全般に変動量が小さいと言える。この傾向は、変動量の分布についても同様で、どの態度も変動量10以下の者が90%以上を占めている。これらのことから、す

表4 各社会的態度の変動量の平均値と標準偏差および変動量の分布(男子)

社会的態度	学年	1-2	2-3	3-I	I-II	II-III
	変動量					
保守的	0~5	34	38	44	42	46
	6~10	14	11	4	8	3
	11~15	2	1	2	0	0
	16~20	0	0	0	0	1
	21~52	0	0	0	0	0
	M	4.12	4.26	3.18	2.68	2.48
	S D	3.33	2.96	2.72	2.56	2.67
革新的	0~5	38	37	43	41	38
	6~10	10	8	6	8	10
	11~15	2	4	1	1	2
	16~20	0	0	0	0	0
	21~52	0	1	0	0	0
	M	4.10	4.30	2.80	3.26	3.78
	S D	2.86	4.44	2.46	2.66	3.13
大衆社会的	0~5	36	40	39	37	39
	6~10	11	6	8	11	8
	11~15	2	3	3	1	3
	16~20	1	1	0	1	0
	21~52	0	0	0	0	0
	M	4.88	3.60	4.00	3.74	4.06
	S D	3.44	3.91	3.38	3.77	3.29

表5 各社会態度の変動量の平均値と標準偏差および変動量の分布(女子)

社会的態度	学年	1-2	2-3	3-I	I-II	II-III
	変動量					
保守的	0~5	34	38	35	35	39
	6~10	8	6	8	9	4
	11~15	1	0	1	0	1
	16~20	1	0	0	0	0
	21~52	0	0	0	0	0
	M	3.75	2.96	3.36	3.18	2.70
	S D	3.50	2.02	2.46	2.44	2.49
革新的	0~5	39	37	36	37	42
	6~10	4	6	7	6	1
	11~15	1	1	1	0	1
	16~20	0	0	0	1	0
	21~52	0	0	0	0	0
	M	3.27	3.25	3.30	3.36	2.34
	S D	2.50	2.69	2.71	3.43	2.17
大衆社会的	0~5	30	37	33	38	39
	6~10	13	7	10	6	4
	11~15	1	0	1	0	0
	16~20	0	0	0	0	1
	21~52	0	0	0	0	0
	M	3.84	2.98	3.39	2.86	2.73
	S D	2.81	2.12	2.67	2.55	2.84

すべての態度について、男女とも全体に変動は小さいと言えよう。

次に、どの時期に一番変動量が多いかを見るために、変動量の平均値の比較をする。

まず、表4の男子について、保守的態度では、中学1年と中学2年との間の変動量が、高校1年と高校2年、高校2年と高校3年との間の変動量より有意に大きかった（いずれも $P < .05$ ）。また、中学2年と中学3年との間の変動量が、中学3年と高校1年、高校1年と高校2年、高校2年と高校3年との間の変動量より有意に大きかった（それぞれ $P < .05$, $P < .05$, $P < .01$ ）。これらの結果から、保守的態度の得点は、中学1年と中学2年との間および中学2年と中学3年との間で変動が大きく、その後学年の進むにつれて、変動の巾が小さくなっていくことがわかる。

革新的態度では、中学1年と中学2年との間の変動量が、中学3年と高校1年との間の変動量より有意に大きかった（ $P < .05$ ）。また、中学2年と中学3年との間の変動量が、中学3年と高校1年との間の変動量より有意に大きかった（ $P < .01$ ）。このように、革新的態度の得点でも保守的態度の得点と同様に、中学1年と中学2年との間および中学2年と中学3年との間で変動の大きい

ことがわかる。

大衆社会的態度では、中学1年と中学2年との間の変動量が、中学2年と中学3年との間の変動量より有意に大きい（ $P < .05$ ）ことのみ示された。

次に、表5の女子について見てみる。

保守的態度では、変動量のいずれの組合せにおいても有意となる差は見られなかったが、中学1年と中学2年との間の変動量が、高校1年と高校2年との間の変動量より大きい傾向にある（ $P < .10$ ）ことが示された。

革新的態度では、中学3年と高校1年との間の変動量が、高校2年と高校3年との間の変動量より有意に大きく（ $P < .05$ ）、また高校1年と高校2年との間の変動量が、高校2年と高校3年との間の変動量より有意に大きかった（ $P < .05$ ）。

大衆社会的態度では、中学1年と中学2年との間の変動量が、高校2年と高校3年との間の変動量より有意に大きい（ $P < .05$ ）ことが示された。

以上の結果から、女子の場合、革新的態度を除く他の2つの態度で、男子の場合と同様、中学1年と中学2年との間の変動量が一番大きいことがわかる。しかし、より興味ある知見は、3つの態度すべてにおいて、高校2年と高校3年との間の変動量が一番小さいことである。

表6 各社会的態度の年間最大変動量の出現時期と変動量の分布(男子)

社会態度	出現時期 変動量	出現時期					2つ以上の時期にまたがるもの	計
		1-2	2-3	3-I	I-II	II-III		
保守的	0~5	3	7	1	3	2	5	21
	6~10	8	7	1	4	2	2	24
	11~52	1	0	2	0	1	1	5
	計	12	14	4	7	5	8	50
革新的	0~5	4	4	2	3	3	7	23
	6~10	4	4	1	4	1	5	19
	11~52	1	5	0	0	2	0	8
	計	9	13	3	7	6	12	50
大衆社会的	0~5	5	0	1	4	2	5	17
	6~10	6	4	2	4	3	3	22
	11~52	1	4	1	2	2	1	11
	計	12	8	4	10	7	9	50

表中1-2は、最大変動量が中学1年と中学2年との間にみられたことを意味する。以下2-3は中学2年と中学3年との間に、3-Iは中学3年と高校1年との間に、I-IIは高校1年と高校2年との間に、II-IIIは高校2年と高校3年との間にみられたことを意味する。表7についても同様である。

表7 各社会的態度の年間最大変動量の出現時期と変動量の分布(女子)

社会態度	出現時期	1-2	2-3	3-I	I-II	II-III	2つ以上の時期にまたがるもの	計
	変動量							
保守的	0~5	4	2	3	1	1	10	21
	6~10	4	3	4	5	2	1	19
	11~52	2	0	1	0	1	0	4
	計	10	5	8	6	4	11	44
革新的	0~5	4	5	4	6	2	3	24
	6~10	2	4	4	4	0	2	16
	11~52	1	1	0	1	1	0	4
	計	7	10	8	11	3	5	44
大衆社会的	0~5	3	1	2	4	3	7	20
	6~10	6	2	2	2	2	7	21
	11~52	1	0	1	0	1	0	3
	計	10	3	5	6	6	14	44

女子の場合、すべての変動量の平均が4.0以下で、全般に態度得点の変動が小さいが、高校Ⅱ年から高校Ⅲ年にかけて最も変動がなく、社会的態度が安定し始めていることがうかがわれる。

個人ごとのデータを手がかりにして、となり合った時点間の変動量のうち最大のものを求め、年間の最大変動量を示す時期とその時点での変動量の分布を調べた(表6, 表7)。

まず、男子の場合(表6)、保守的態度和革新的態度は中学2年から中学3年の時期に、大衆社会的態度は中学1年から中学2年の時期に、最大の変動量を示す者が他の時期に比べてやや多くなっている。これらの結果は、先の変動量の平均値の検討結果とほぼ合致しており、男子については、3つの社会的態度は中学1年から中学2年あるいは中学2年から中学3年の時期に変動するものと考えられる。なお、ここでも変動量の大きさは10以下のものがほとんどで、変動の中は小さいと言える。

女子の場合(表7)、保守的態度和大衆社会的態度は中学1年から中学2年の時期に最大の変動量を示す者が多く、平均値の検討結果にほぼ合致している。しかし、革新的態度は中学2年から中学3年の時期と高校Ⅰ年から高校Ⅱ年の時期の2つの時期で、最大の変動量を示す者がほぼ同数いることを示しており、はっきりとしたことは言えない。なお、女子でも、変動量の大きさの分布から10以下のものがほとんどで、最大変動量の中は小さいことがわかる。

以上、各態度得点の年間変動量の分析から、男女とも全般には変動量が小さいものの、男子の3つの態度および女子の保守的、大衆社会的態度は、中学1年から中学2年あるいは中学2年から中学3年の時期に変動するものが多いと言える。

2. 被調査者のグループ化の試み

これまでみてきたように、全体として中学生・高校生の社会的態度はかなり安定していると言える。ところで、高校生が大人の社会に対してどのような見方をしているのか、その社会へどのようなかたちで参加しているのかなどを問うた面接調査の結果を検討してみると、政治や社会に対する関心が薄く他者志向的な生き方をしようとする人や、政治などに対して関心を持つ必要性は感じながらも、現在のところ積極的に参加しようとはしない人など、さまざまなものがある。

そこでここでは、主に個人個人の社会的態度の変容過程に注目して、被調査者のグループ化を試みる。

(1) クラスタ分析によるグループ化

被調査者をグループ化するために、先の全般的分析に用いたデータと同じものを用い、6年間の3つの社会的態度の態度得点を変量としたQモードクラスタ分析を行なった。この分析方法によれば、個体(被調査者)間の距離の近いもの同士が1つのまとまりとして結合されていく。したがって、全体がいくつかのグループにまとめられるように、距離の近いもの同士を結合する作業を

繰り返すことになる。

本研究では、この分析によって3つのグループが見出された。どのグループにも属さない被調査者群を1つの

グループとして扱い、表8には4つのグループの人数の内訳を男女別に示した。3つのグループに含まれる被調査者は全体の約70%であった。一方、いずれのクラスターにも含まれない被調査者は第4グループとして扱ったが、それは全体の30%を占めている。これらのグループの男女別の内訳をみると、女子は各グループに均等に散らばっているのに対し、男子の場合には、第2グループの人数が著しく少ないことがわかる。

表8 グループの内訳

性別 \ グループ	1	2	3	4	計
男子	11	3	18	18	50
女子	10	11	12	11	44
計	21	14	30	29	94

表9 第1グループにおける6年間の態度得点の平均値と標準偏差(N=21)

社会的態度	学年	平均・標準偏差	中1	中2	中3	高I	高II	高III
			M	34.57	30.43	30.29	29.38	31.43
保守的		SD	5.66	4.10	4.19	3.98	3.75	4.31
		M	48.19	50.57	50.29	49.43	49.43	48.48
革新的		SD	4.27	3.23	2.99	3.46	4.15	4.09
		M	28.57	28.33	29.10	29.95	30.10	30.14
大衆社会的		SD	3.54	3.77	3.95	4.46	3.93	5.28

表10 第1グループの態度別時点間相関

社会的態度	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
保守的	中1	1.000					
	中2	0.502*	1.000				
	中3	0.304	0.389	1.000			
	高I	0.478*	0.705***	0.616***	1.000		
	高II	0.155	0.437**	0.544**	0.614**	1.000	
	高III	0.339	0.474*	0.529*	0.568**	0.660***	1.000
革新的	中1	1.000					
	中2	0.185	1.000				
	中3	-0.142	0.131	1.000			
	高I	0.304	0.302	0.586**	1.000		
	高II	0.393	0.113	0.312	0.641***	1.000	
	高III	0.627***	0.250	0.269	0.518*	0.625***	1.000
大衆社会的	中1	1.000					
	中2	0.125	1.000				
	中3	0.143	0.490*	1.000			
	高I	-0.007	0.486*	0.555**	1.000		
	高II	-0.011	0.390	0.257	0.545**	1.000	
	高III	-0.048	0.187	-0.044	0.075	0.595**	1.000

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究(1)

(2) 各グループの態度別平均値および相関

グループごとの特徴を明らかにするために、各グループの6年間の態度別平均値と標準偏差、態度別の6年間の時点間相関を求めた。第1グループから第3グループの態度別平均値と標準偏差を表9、表11、表13に、またグループごとの態度別時点間相関を表10、表12、表14に示した。第4グループについては1つのグループとはみなし難いので、詳細な分析を省略したが、各グループの

特徴を記述する際の参考として、態度別平均値と標準偏差を表15に掲げることとした。なお、第1グループから第3グループの態度別平均値は、図1から図3にも示した。

まず、各グループの特徴を表と図を参考にしながら述べることにする。

1) 第1グループ 表9、表10および図1、図2、図3によれば、保守的、革新的、大衆社会的態度のいずれ

表11 第2グループにおける6年間の態度得度の平均値と標準偏差(N=14)

社会的態度	平均・標準偏差	学年					
		中1	中2	中3	高I	高II	高III
保守的	M	38.07	37.07	36.36	37.14	38.86	39.93
	SD	3.26	3.99	3.70	2.23	3.54	3.84
革新的	M	47.71	45.00	43.43	43.50	43.29	45.14
	SD	1.98	3.27	3.60	3.66	2.40	2.64
大衆社会的	M	36.79	38.14	39.71	42.00	41.00	42.43
	SD	5.31	3.25	3.63	3.27	2.93	2.32

表12 第2グループの態度別時点間相関

社会的態度	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
保守的	中1	1.000					
	中2	0.455	1.000				
	中3	0.513	0.633*	1.000			
	高I	-0.070	-0.138	0.132	1.000		
	高II	-0.209	-0.383	-0.051	0.617*	1.000	
	高III	-0.222	-0.312	0.148	0.559*	0.765***	1.000
革新的	中1	1.000					
	中2	0.276	1.000				
	中3	-0.574*	-0.133	1.000			
	高I	-0.463	0.334	0.558*	1.000		
	高II	-0.298	0.254	-0.113	0.252	1.000	
	高III	-0.402	-0.058	0.136	0.059	0.466	1.000
大衆社会的	中1	1.000					
	中2	0.395	1.000				
	中3	0.171	0.336	1.000			
	高I	0.485	0.249	0.450	1.000		
	高II	0.418	-0.090	-0.034	0.306	1.000	
	高III	-0.062	-0.226	0.150	0.226	0.147	1.000

も、ほとんど大きな変動はない。そして、保守的態度については中学2、3年頃から比較的安定しており、革新的態度、大衆社会的態度も隣接する学年間では安定した関係がみられる。また、3つの図から明らかなように、他のグループに比べて、保守的態度と大衆社会的態度の得点が低く、革新的態度得点が高いという特徴がある。

2) 第2グループ 表11, 表12および3つの図から、このグループでは、保守的態度の得点が中学3年以降次第に高くなり、保守的傾向が強くなることがわかる。一

方、革新的態度については、中学から高校Ⅱ年にかけて、革新的でない方向への変化が認められる。大衆社会的態度は、中学3年間と高校3年間との間に明確な差があり、中学に比べると高校になって大衆社会的傾向が強くなる。

時点間相関を見てみると、保守的態度は高校になると比較的安定した様相を示しているが、革新的態度、大衆社会的態度についてはほとんど有意な関係がみられず、変動しつつあることをうかがわせる。なお、このグループは、他のグループに比べて大衆社会的態度得点が高い

表13 第3グループにおける6年間の態度得点の
平均値と標準偏差 (N=30)

社会的態度	学年 平均・標準偏差	中1	中2	中3	高I	高II	高III
		保守的	M 37.57 SD 3.50	36.57 3.12	35.50 2.64	36.20 2.98	34.53 3.51
革新的	M 46.17 SD 3.12	45.93 2.89	45.53 2.59	45.10 2.62	45.97 3.23	45.13 3.27	
大衆社会的	M 33.70 SD 3.43	34.27 2.93	34.67 2.81	34.27 2.26	34.73 2.79	35.07 3.48	

表14 第3グループの態度別時点間相関

社会的態度	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
保守的	中1	1.000					
	中2	0.509**	1.000				
	中3	0.114	0.310	1.000			
	高I	0.344	0.547***	0.643***	1.000		
	高II	0.486**	0.332	0.359***	0.566**	1.000	
	高III	0.237	0.272	0.542***	0.488**	0.673***	1.000
革新的	中1	1.000					
	中2	0.345	1.000				
	中3	0.389*	0.268	1.000			
	高I	0.075	0.247	0.203	1.000		
	高II	0.311	-0.061	0.185	0.390*	1.000	
	高III	0.203	-0.225	0.212	0.383*	0.530***	1.000
大衆社会的	中1	1.000					
	中2	0.303	1.000				
	中3	0.409*	0.185	1.000			
	高I	0.302	-0.006	0.287	1.000		
	高II	0.580***	0.176	0.597***	0.117	1.000	
	高III	0.072	0.051	0.387*	0.205	0.520**	1.000

表15 第4グループにおける6年間の態度得点の
平均値と標準偏差(N=29)

社会的態度	学年		中1	中2	中3	高I	高II	高III
	平均・標準偏差							
保守的	M		35.59	35.59	36.34	36.62	37.21	36.72
	SD		5.63	6.26	4.89	5.49	5.75	6.01
革新的	M		47.76	45.48	44.93	45.38	45.38	46.17
	SD		4.73	6.01	6.26	6.28	6.73	5.39
大衆社会的	M		33.38	34.83	35.62	36.48	35.93	36.28
	SD		6.88	6.56	6.62	7.67	7.40	7.78

こと、また表8から明らかのように、女子の割合が多いという特徴がある。

3) 第3グループ 表13, 表14および3つの図を見ると、このグループでは、保守的態度については学年の進むにつれて保守的でない方向への変化が認められるが、革新的態度および大衆社会的態度については、ほとんど変動が見られない。また、時点間相関の結果から、高校になると保守的態度と革新的態度がかなり安定してくることがわかる。さらに、3つの図から明らかのように、他の2つのグループに比べると、あまり変化のないグループであると言える。

4) 第4グループ 参考のために、表15に基づいて、このグループの特徴を記述する。このグループは第3グループよりもさらに得点の変化に乏しく、3つの態度はほとんど変化しない。また、一方向への変化があまりみられず、いずれの態度も微動しているにすぎない。このことから直ちに、これらの被調査者が3つのクラスターから排除された原因は、得点の変化の小さいことにあると考えることはできない。むしろ、他のグループに比べて各態度得点の分散が大きいことから、第4グループの被調査者の中に、極端な得点をとる者の多いことが考えられる。つまり、このグループの被調査者の反応パターンに特殊な傾向がみられるとも考えられるので、今後の詳しい分析を待ちたいと思う。

これまで図表を参考に各グループの特徴の概略を述べてきたが、以下では、第1グループから第3グループまでのグループ別態度得点の変動について詳しく検討する。

まず、第1グループの3つの態度について見ていく。表9から、保守的態度得点は、中学1年に比べると中学2年、3年(いずれも $P < .01$)および高校I年、II年、III年の方が有意に低い(それぞれ $P < .001$, $P < .05$, $P <$

.05) こと、また高校I年よりも高校II年、III年の方が高いこと(いずれも $P < .05$)などがわかる。また、時点間相関について表10を見てみると、中学1年および中学2年と他の学年との相関は一部で有意な結果が得られていないが、中学3年以降はすべての学年との間に有意な相関を見ることができる。このことは、第1グループにおいては、中学の後半から保守的態度が保守的でない方向でかなり安定してくることを意味している。一方、革新的態度については、中学1年よりも中学2年でやや高い($P < .05$)が、それ以外に学年間で態度得点に有意な差は見られない。表10から革新的態度の時点間相関は、中学3年以降隣接する学年間での有意な相関は認められるが、全般に有意な関連はあまり見られず、安定しているとは言いがたい。このような傾向は、大衆社会的態度に

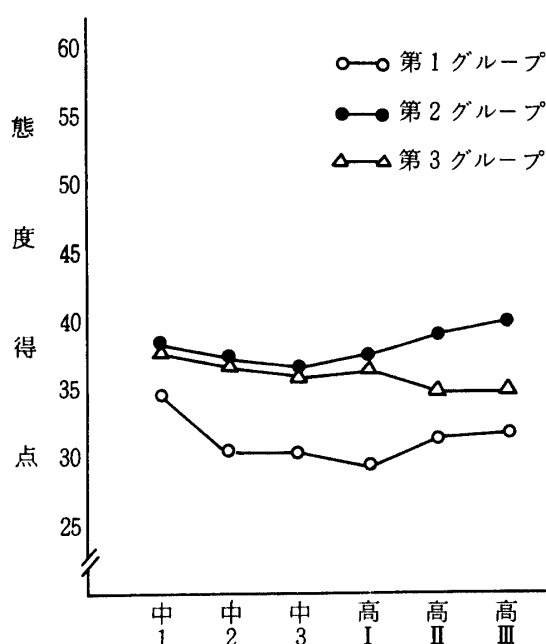


図1. 保守的態度得点の変化

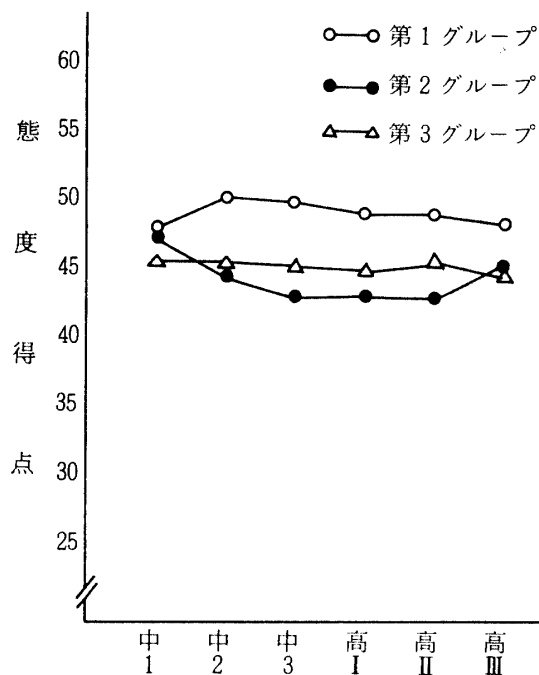


図2. 革新的態度得点の変化

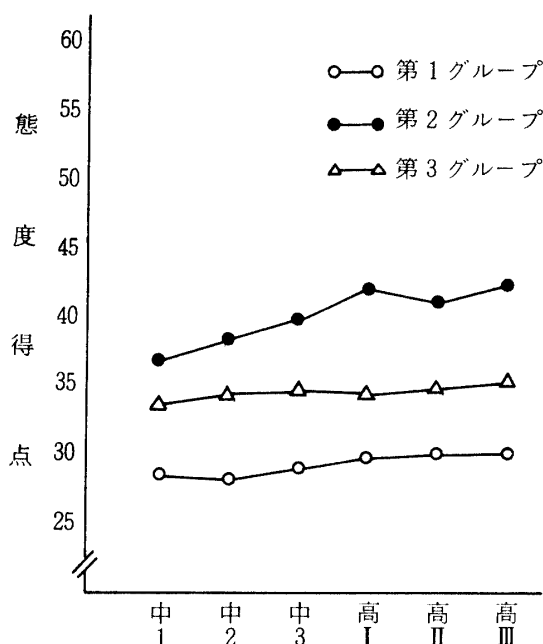


図3. 大衆社会的態度得点の変化

についても認められる。表10から明らかなように、6年の間ほとんど平均値の変動がなく、時点間相関も中学2年以降隣接する時点間での相関は有意であったものの、それ以外に目立った結果は得られなかった。

次に、第2グループについて見てみよう。保守的態度は、表11から、中学3年に比べて高校Ⅲ年の得点が高く ($P < .05$)、また高校Ⅰ年に比べて高校Ⅱ年、Ⅲ年の得点が高い (それぞれ $P < .05$, $P < .01$) ことがわかる。また、表12に見られるように、保守的態度の時点間相関も

高校3年間の相互の関連はかなり明確であり、高校Ⅰ年と高校Ⅱ年、Ⅲ年との間の相関および高校Ⅱ年とⅢ年との間の相関は有意である。これに対して、中学各学年間の相関を見ると、中学2年と3年との間の相関だけが有意であり、全般的に関連は明確ではない。これらの結果から、第2グループは、高校になってから保守的態度が安定してくると言える。

第2グループの革新的態度は、中学1年の得点に比べて、中学2年、3年 (それぞれ $P < .05$, $P < .01$) および高校Ⅰ年、Ⅱ年、Ⅲ年 (それぞれ $P < .01$, $P < .001$, $P < .05$) の得点が有意に低い。さらに高校Ⅱ年とⅢ年とを比べると、高校Ⅲ年の得点の方が有意に高い ($P < .05$)。この結果および図2から、このグループの革新的態度が、中学2年から高校Ⅱ年にかけて革新的でない方向へ変化することがわかる。しかし、その変化は、表12の時点間相関の結果から明らかなように、あまり安定したものではない。次に、大衆社会的態度について見てみよう。表11から、中学1年に比べて高校Ⅰ年、Ⅱ年、Ⅲ年の得点の方が有意に高く (それぞれ $P < .01$)、また中学2年と比べても高校Ⅰ年、Ⅱ年、Ⅲ年の得点の方が高い (それぞれ $P < .01$, $P < .05$, $P < .01$) ことがわかる。さらに、中学3年に比べて高校Ⅰ年、Ⅲ年の方が高い (それぞれ $P < .05$)。このように、中学の各学年に比べて高校の各学年の得点の高いことがわかるが、図3からも、学年の進むにつれて大衆社会的傾向の強くなっていくことがわかる。ここに、第2グループの特徴を見ることができる。

第3グループの結果については、表13を参照しながら検討する。保守的態度は、中学1年よりも中学3年および高校Ⅱ年、Ⅲ年の方が有意に低く (それぞれ $P < .05$, $P < .001$, $P < .01$)、また中学2年に比べると高校Ⅱ年、Ⅲ年の方が有意に低かった (それぞれ $P < .01$, $P < .05$)。同様の結果が高校Ⅰ年と高校Ⅱ年、Ⅲ年との間にも見られ、高校Ⅱ年、Ⅲ年の方が有意に低かった (それぞれ $P < .01$, $P < .05$)。また、表14から明らかなように、中学3年から高校Ⅲ年までの時点間相関を見ると、中学3年と高校Ⅱ年の組合せを除いてすべての組合せで有意な相関が得られている。これらのことから、高校Ⅱ年以降保守的でない方向への変化が認められ、この変化はかなり安定したものであると言える。一方、革新的態度、大衆社会的態度については学年間に大きな変化は見られず、時点間相関の結果からも目立った結果は得られなかった。

(3) 態度別学年別グループ間比較

これまでの分析結果から、3つのグループはそれぞれに特徴を持っていることがわかる。ここでは、図1、図

2, 図3を参照しながら, それぞれの態度において, 学年の進行とともにどのようにグループ間差異があらわれにくくなるのかを比較検討する。

まず, 保守的態度について学年ごとにグループ間で比較してみる(図1)。中学1年では第1グループと第3グループとの間のみ有意な差がみられ, 第1グループの得点の方が低かった($P < .05$)。中学2年以降高校1年までは, 第1グループの得点は第2グループよりも有意に低く(各学年それぞれ $P < .001$), また第3グループと比べても有意に低かった(各学年それぞれ $P < .001$)。一方, 高校2年では, 第1グループが第2グループ, 第3グループよりも有意に低く(それぞれ $P < .001$, $P < .01$), また第2グループよりも第3グループの方が得点が低かった($P < .001$)。同様に, 高校3年においては, 第1グループは, 第2, 第3グループより得点が低く(それぞれ $P < .001$, $P < .05$), さらに第2グループよりも第3グループの得点は低かった($P < .001$)。これらの結果から, 保守的態度はもともと得点の低い第1グループでは, 中学1年から1つの傾向が認められるが, 残りのグループのうち第2グループでは, 高校2年以降保守的傾向が強くなって, その時点で3グループに分かれる。

革新的態度について図示したのが図2である。革新的態度は, 中学1年の時点では3グループの間に有意な差は見られず, ほとんど違いがない。しかし, 中学2年以降第1グループは他の2つのグループよりも常に得点が高く, 有意な差が見られた(第1グループと第2グループとの間では, 中学2年から高校2年まで $P < .001$, 高校3年では $P < .05$; 第1グループと第3グループとの間では, 中学2年から高校1年まで $P < .001$, 高校2年と3年で $P < .01$)。また, 中学3年と高校2年で第2グループの方が第3グループより得点が低いという結果が得られているが(それぞれ $P < .05$, $P < .01$), 全体としては, この2つのグループの変化は小さい。

図3には, 大衆社会的態度についての結果を示した。学年ごとにグループ間の違いを検討したところ, 中学1年で第2グループと第3グループとの間に差が認められなかった以外は, 6学年を通してすべてのグループ間の比較が有意であった(いずれも $P < .001$)。このことは, 大衆社会的態度の傾向の違いが青年期のかなり早い時期から見られること, そして, この違いがわれわれの得た3つのグループに顕著にあらわれていることを意味している。

IV 討 論

1. 縦断的データの全般的分析に関する討論

縦断的データの全般的分析から明らかになったことをまとめてみると, 次のとおりである。

(1) 革新的態度の態度得点は, 他の2つの態度得点よりも高い(表1)。

(2) 大衆社会的態度得点は, 学年の進むにつれて高くなる傾向がある(表1)。

(3) 男子の大衆社会的態度および女子の3つの態度すべてが, 6年間を通してかなり一貫している(表2)。

(4) 保守的態度と革新的態度は負の相関関係を, 大衆社会的態度と保守的態度は正の相関関係を持つ(表3)。

(5) 各社会的態度の年間変動量は, 全般に小さい。しかし, 6年間のうちでは, 中学1年から中学2年の間あるいは中学2年から中学3年の間に多く変動が見られる(表4, 表5, 表6, 表7)。一方, 最も変動が小さいのは女子の高校2年から高校3年の間である(表5, 表7)。

以上の諸結果は, 全体として, 前回までの報告(久世ほか, 1975, 1977, 1978)とかなり一致している。特に, 革新的態度得点が保守的態度得点および大衆社会的態度得点に比べて高いという知見は, これまで一貫して指摘し続けてきたことである。この知見は, 大学生を被調査者として検討した研究(後藤ほか, 1979)でも得られており, いわゆる青年期全般にわたって見られる傾向と言えよう。

大衆社会的態度得点が学年の進むにつれて高くなる傾向にあるという結果も, これまで何度か指摘してきた。この結果は, 大衆社会的態度得点の6年間の相関係数が一貫して高いという結果とあわせて考えると, その漸進的な変化が理解でき, 中学生・高校生が徐々に大衆社会的態度を強めていくことがわかる。

次に, 保守的態度と革新的態度は負の相関関係を, 大衆社会的態度と保守的態度は正の相関関係を持つこともこれまで指摘してきた。また, この結果も大学生の研究(後藤ほか, 1979)で得られており, 保守的態度と革新的態度が相反した内容のもの, 大衆社会的態度と保守的態度が類似した内容のものとして捉えられていることがわかる。ただ, 結果のところでも少し述べたように, このような各態度間の関係ははっきりしてくるのは, 男子では中学3年以降, 女子では中学2年以降である。このことと, 変動量の分析で中学1年から中学2年の間あるいは中学2年から中学3年の間に多く変動が見られるという結果とを考え合わせると, この時期に社会的態度がは

はっきりしはじめるものと思われる。以前、面接調査を実施して、社会認識のはっきりしてきた時期を問うたところ、中学生の頃という回答が多かった(久世ほか, 1977)。このことから、中学生の時期に、社会的態度がある程度ははっきりしてきて、その形成がなされるものと考えられる。

以上、6年間の縦断的データをもとに検討した結果は、これまでわれわれが指摘してきた諸結果とかなり一致している。しかし、今回上に述べたように、社会的態度の形成の時期がある程度全般的分析から明らかになりつつある。今後、個人ごとの分析で、その時期がいつなのか、その契機となる要因は何なのかを明らかにしていく必要がある。

2. 被調査者のグループ化に関する討論

まず、被調査者をグループに分けるために行なったクラスタ分析の結果と各グループについての主な特徴をまとめておく。

(1) クラスタ分析によって、被調査者の70%を3つのグループに分けることができた(表8)。しかし、残りの30%の者については、いずれのグループにも含めることはできなかった。

(2) 3つのグループのうち、第1グループは他のグループよりも保守的態度和大衆社会的態度得点が低く、革新的態度得点が高い。しかも、3つの態度はいずれもほとんど変動がない(表9, 表10)。

(3) 第2グループは、女子の割合が多いグループで、中学3年間に比べると高校3年間に保守的態度和大衆社会的態度の得点が高くなり、それらの傾向が強くなる。特に、他のグループに比べて、大衆社会的態度得点が高い(表11, 12)。

(4) 第3グループは、保守的態度和若干の変化が認められるものの、3つの態度はほとんど変動がなく、他のグループと比べて中間的なグループである(表13, 表14)。

また、各態度ごとに学年別にグループ間の比較を行なったところ、次の点が明らかになった。

(1) 保守的態度和革新的態度については、中学1年でグループ間の違いは顕著でないが、中学2年以降特に第1グループが他の2つのグループに比べて、保守的でない方向および革新的な方向への変化を示す(図1, 図2)。

(2) 大衆社会的態度については、中学1年の段階ですでに3つのグループ間に明らかな差異が認められる。しかも学年の進行にともない、大衆社会的な方向への顕著な変化を示すグループがあり、一層グループ間の違いが

はっきりしてくる(図3)。

われわれは、縦断的調査資料に基づいて社会的態度の変容過程を明らかにする一つの試みとして、Qモードクラスタ分析による被調査者のグループ化を行なった。得られた結果によると、3つのグループが得られ、それぞれのグループに明確な特徴を見出すことができた。その点では、この試みによってかなり有益な情報がもたらされたと言える。

全体をながめてみると、やはり3つのグループは個々に特徴のある集団であり、中学1年、2年頃から革新的な傾向が強くなり、保守的および大衆社会的な傾向の弱い第1グループ、ほとんど変動しない第3グループ、そして、保守的、大衆社会的な方向への変化を見せる第2グループは、それぞれに理解できる集団である。6年間の得点の変化を社会的態度の発達変容の過程と考える時、主な変化が生じる時期は、これら3グループに共通している。つまり、1の全般的分析に関する討論でも触れたように、いずれの態度においても、中学2年頃から変化の兆しが見え始めている。

われわれが見出した第2の点は、大衆社会的態度得点が中学1年の段階からグループによって大きく異なっているということである。特に、最も得点の高い第2グループは、他のグループに比べて女子の割合が多く、その点についての検討も今後必要になってくる。いずれにしても、大衆社会的態度得点について中学1年の段階でグループによる差が見られることは、それが中学入学以前の問題なのか、それとも中学入学後およそ1年間の学校生活の影響なのかという検討はなされなければならないだろう。

ここで、クラスタ分析の結果、どのグループにも含まれなかったいわゆる第4グループについて触れておく。表15によると、他の3つのグループに比べて最も数値が安定しているように見えるが、われわれは、第4グループの標準偏差が他のグループに比べてかなり大きいことに注目したい。被調査者全体の中で考えると、このグループに属するサンプルは、かなり特異なサンプルであると思われる。したがって一つのまとまりとしては、どのクラスタにも含まれなかったものと考えられる。これらのサンプルがどのような反応パターンを示しているのかという問題については、さらに詳細な検討を必要とするが、一例として、われわれが設定した3つの態度とは異なる枠組の中で一貫した反応パターンをとっているタイプ、あるいはほとんどの項目に対して「どちらともいえない」という中点反応をしているタイプなどが考えられ

る。

3. 総括討論

われわれはこれまで、青年期における社会的態度の発達変容過程を明らかにする目的で、中学から高校にかけての6年間の縦断的調査資料を収集してきた。これまで明らかにされた結果をまとめてみると、①社会的態度の発達変容過程を考える時、中学2年頃に変化の兆しがかがえる。②社会的態度の変化を個人ごとに見ると、その変化のしかたから、被調査者を3つのタイプに分けることができる。③社会的態度を保守的、革新的、大衆社会的の3つの側面から捉える時、大衆社会的態度の動向が重要なカギになるだろうということ、④その動向と関連して、男子と女子とでは発達過程に若干の違いが見られること、などの点を指摘できる。

社会的態度の発達の問題は、社会認識の発達と関連がある。青年が、自分の住んでいる社会での様々な出来事についてどのような印象を持つのか、また社会というものをごどのように考えていくのか。このような事柄に関心を持つようになるためには、青年たちが社会を客体化していかななくてはならない。それは、言い換えれば自己と自己を取り巻く世界とを分離して考えるようになること、つまり自己意識の発達と関連する問題であると言えよう。このような自己意識の芽生えは、中学生の頃に見られると言われている。中学校へ入学すること自体が、子どもから大人への変化の第一歩であるが、青年期にはいり、学校教育とりわけ社会科教育を通じて社会的事象に注目させられるという経験は、青年を一層成長させることになる。こうした学校教育の中での経験をはじめ、青年自身で試みる様々な体験に基づいて、社会認識は発達し変化していくものと思われる。

学校教育によって伝達される知識の多くは、男女平等とか、自由を尊重すべきであるといったような民主主義的な価値観に基づいている。しかし、青年期までに行なわれる社会化の過程を考えると、青年が身につけている知識や行動様式の多くは、おもに両親をはじめとする家庭やマス・コミの影響をかなり受けていると考えることができる。しかもマス・コミが伝達する情報は、個々の青年たちにかかなり画一的に与えられる。それに対して、家庭で伝達される様々な情報は、価値観にかかわるものも含めて、それぞれの家庭において大きく異なっている。したがって、例えばわれわれが見出したような3つのタイプの青年の社会的態度の発達変容過程を考える場合に、態度の変容にかかわる要因を明らかにすることは、かな

り困難であると言わざるを得ない。

いわゆる伝統的な価値観は、家庭において伝達されやすいが、それはわれわれの言う保守的態度と対応していると考えられる。また、革新的態度と対応する価値観は、主として学校教育において伝達されると考えられる。一方、大衆社会的態度に対応する価値観は、おもにマス・コミや仲間によってもたらされていると考えることもできる。ここで、この3つのタイプの価値観が伝達される状況を考えてみよう。家庭で伝達される価値観は、おもに青年たちよりも一世代前の価値観を基調としている。これは、いわゆる伝統的価値観とよばれるものに近い。したがって、児童期までは従順にその価値観を受容していたとしても、社会に目を向けるようになり、現実の問題に直面して多様な経験を重ねる時、そのような伝統的な価値観について青年は再検討を迫られる。このような経験がいつ頃からなされるかによって、保守的態度の変容過程に違いが見られると思われる。

一方、革新的な価値観は、おもに学校教育を通じて伝達されるが、現在の教育体制の中では、個々の断片的な知識として伝達されがちで、必ずしもこれらの知識を統合して、科学的な物の見方を育てるということは難しいのではないだろうか。そして、むしろかなりの青年は、受験体制の中で勝ち抜くための技術を磨くことを学校生活のおもな目標の1つとしているように思われる。われわれの得た結果によると、中学1年から2年にかけて、より革新的な方向への、そしてまた保守的でない方向への変化を見せる青年も一部にはいるが、多くの青年には革新的態度での著しい変化は認められない。

ところで、おもにマス・コミなどが伝達する価値観についてはどうであろうか。いわゆる大衆社会的態度の内容は、政治的無関心と大衆社会的同調傾向に関係している。われわれは、グループ間の比較から、大衆社会的態度が中学1年においてすでに3つのグループの間で明確な違いがあることを見てきた。このことは、青年たちがすでに中学校以前の段階でマス・コミなどの影響をかなり受けて、周囲の状況に合わせた行動をとろうとしていることを予想させる。また、最も大衆社会的傾向の強いグループの大半が女子であるということは、政治的な事柄に無関心であることや仲間や社会の大勢に同調していくことに価値をおいている者が多いことを意味している。この点に関してはさらに検討を加える必要があるが、青年期における社会化の問題を考える時、女子青年に対しては男子青年とは異なる社会的役割が期待されているということを考慮すべきである。

われわれは、名古屋大学附属中学校および高等学校という限定されたサンプルの結果に基づいて考察を加えてきた。そして、限られた対象の中で、3つの異なるタイプの被調査者グループを見出した。この3つのタイプが、他の多くの青年にも認められるか否かは、さらに別の角度からの検討を必要とする。特に3つのタイプの違いが、現在の高校生や中学生を取り巻く受験体制あるいは性役割の問題と関連して見なければならぬならば、例えば、大学受験とはあまり関係のない商業科、工業科、農業科などの高校生が、どのような社会的態度の発達の様相を示すかという問題は、以前に指摘したように検討を要するであろう。また、これまでの結果から、高校生ばかりでなく大学生においても、文科系・理科系というコース、あるいは短期大学と4年制大学という種別などによって、青年をいくつかのタイプに分けることができると考えられる。こうした課題の1つに回答を与えるべく、われわれは別報において（後藤ほか，1979）、大学の種別によって社会的態度の様相がどのように異なるかを検討している。詳細はそちらに譲るが、私立4年制大学に属する青年は、国公立文系あるいは理系に属する青年よりも保守的な傾向の強いことが明らかにされている。このような設立主体による差異が何によるものかは、現在のところ

明らかではないが、この結果が、われわれの今後の研究に示唆を与えてくれるように思われる。

文 献

- 後藤宗理・久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美 1979 大学生の社会的態度に関する研究 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），26，
- 久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（I） 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），21，1-11
- 久世敏雄・速水敏彦 1975 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（II） 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），22，13-24
- 久世敏雄・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美・石黒敬子 1977 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（III） 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），24，67-83
- 久世敏雄・浅野敬子・伊藤義美・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和 1978 中学生・高校生の社会的態度に関する研究（IV） 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），25，119-129

（1979年8月17日受理）

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（I）

付 表

この調査は社会や学校や家庭などに対するみなさんの考え方や態度について調べるものです。現代の中学生や高校生が一般的にどのような考え方をしているのかをみるのが目的ですから、思ったまま卒直に答えて下さい。

名古屋大学教育学部教育原論研究室
発達心理学研究室

[中学・高校] [男・女] (あてはまる方を○で囲んで下さい)

年 ____ 組 ____ 番

調 査 A

1 (やり方)

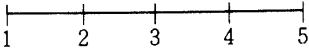
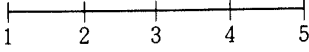
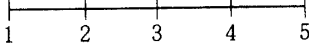
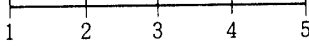
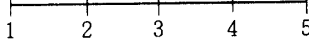
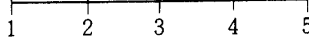
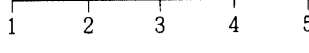
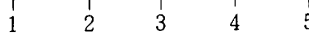
次の39のそれぞれの考え方や態度について、あなたが実際にどう考えているかを 1 非常に賛成 2 賛成 3 賛成とも反対ともいえない 4 反対 5 非常に反対 のうちから1つ選んで○印をつけて下さい。

- | | 非
常
に
賛
成 | 賛
成 | な
い
と
も
い
え
ない | 賛
成
と
も
反
対
と
も
い
え
ない | 反
対 | 非
常
に
反
対 |
|--|-----------------------|--------|----------------------------------|--|--------|-----------------------|
| (1) 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい | (1) | | | | | |
| (2) 個人の自由は尊重すべきである | (2) | | | | | |
| (3) 流行語などはよく知っていないとはずかしい | (3) | | | | | |
| (4) 女が政治などに口だしすべきでない | (4) | | | | | |
| (5) 正しいことであれば世間体など気にすべきでない | (5) | | | | | |
| (6) 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない | (6) | | | | | |
| (7) 結婚は家柄を重んじなければならない | (7) | | | | | |
| (8) いくら恩義のある人でも筋道のおらない頼みごとは断った方がよい | (8) | | | | | |
| (9) みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする | (9) | | | | | |
| (10) 伝統や習慣は尊重すべきである | (10) | | | | | |
| (11) 社会のために正しいことであるなら親の反対をおし切っても行動すべきである | (11) | | | | | |

- | | 非常
に賛
成 | 賛
成 | 不
い
対
と
も
い
え | 賛
成
と
も
反
対 | 反
対 | 非常
に反
対 |
|--|---------------|---|---------------------------------|----------------------------|--------|---------------|
| (12) 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない | (12) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (13) 世間をわたるには義理や人情が最も大切である | (13) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (14) いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである | (14) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (15) 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい | (15) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (16) 長男が家をつぐのは当然だ | (16) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (17) デモヤストをするのは労働者の当然の権利である | (17) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (18) 理論よりフィーリングやムードが大切である。 | (18) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (19) 親孝行は子どもの義務である | (19) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (20) 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する | (20) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (21) 誰が衆議員の選挙で当選しようとする日本の政治はかわらないと思う | (21) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (22) 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい | (22) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (23) 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない | (23) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (24) 今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい | (24) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (25) 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである | (25) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (26) 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである | (26) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (27) 共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする | (27) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (28) 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない | (28) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (29) 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである | (29) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (30) ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ | (30) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |
| (31) 日本は天皇を中心にまとまるべきである | (31) | -----
1 2 3 4 5 | | | | |

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅰ）

非常に賛成 賛成 ないともいえ 反対とも反対 反対 非常に反対

- | | | |
|-------------------------------------|------|---|
| (32) 「方角が悪い」などということはまったく信用しない | (32) |  |
| (33) いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない | (33) |  |
| (34) デモやストでさわぐのは民主国家の恥である | (34) |  |
| (35) 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい | (35) |  |
| (36) 皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感じずる | (36) |  |
| (37) 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい | (37) |  |
| (38) 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである | (38) |  |
| (39) 公害問題は被害者と加害者だけの問題である | (39) |  |

A LONGITUDINAL STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF THE ADOLESCENTS (I)

Toshio KUZE, Motomichi GOTO, Katsumi NINOMIYA, Shuji MIYAZAWA,
Hirokazu IKEDA, Yoshimi ITO, and Keiko ASANO

The purpose of the present study is to clarify the changing processes of the social attitudes of the adolescents on the basis of their longitudinal data for 6 years. For this study the social attitudes are conceptualized as conservative, radical and mass-social attitudes and the questionnaire contains 13 items for each attitude. The longitudinal data for 6 years are obtained by administering a questionnaire to the same subjects once a year.

The subjects are boys and girls in the attached upper and lower secondary schools of the Faculty of Education of Nagoya University. The longitudinal data analysed here are obtained from boys and girls who attended these schools from the school year 1972 to 1977 and from 1973 to 1978.

The results are as follows:

A. The results based on the overall analysis of the longitudinal data:

- 1) The mean scores of radical scale are higher than those of other two scales (Table 1).
- 2) The mean scores of mass-social scale tend to be higher with increasing age (Table 2).
- 3) The inter-occasion correlation coefficients for mass-social scale are significantly high over 6 years in boys. And in girls, those for three scales, conservative, radical and mass-social, are also significantly high over 6 years (Table 2).
- 4) There are significant negative correlations between conservative and radical scores, and significant positive correlations between conservative and mass-social scores (Table 3).
- 5) The fluctuation of each attitude score is small in boys and girls, but there are some fluctuations between the first and second grade and/or between the second and third grade of the lower secondary school (Table 4,5,6,7). There is the least fluctuation between the second and third grade of the upper secondary school in girls over 6 years (Table 5,7).

B. The results based on the Q mode cluster analysis of the longitudinal data:

- 1) The three specific subject groups were found by the Q mode cluster analysis (Table 8).
- 2) The characteristics of the first group are that the scores of conservative and mass-social scales are lower than those of other two groups, and that there is little fluctuation in each attitude score over 6 years (Table 9,10).
- 3) The characteristics of the second group are that the number of girls is more than that of boys in the member of this group, and that the scores of mass-social scale tend to be higher in the upper secondary school. In general, the scores of mass-social scale of this group are high (Table 11,12).
- 4) The characteristics of the third group are that this group is the average group of the three groups, and that the scores of the three social attitudes of this group are the average ones (Table 13,14).
- 5) In the comparison of the scores of the three groups at each grade, the inter-group differences of the scores of mass-social scale are found at the first grade of the lower secondary school (Fig. 1,2,3).

In the discussion, the problems of the effects of the school education, especially the system of the entrance examination, on the development of social attitudes are discussed. Furthermore, the problems of the social attitudes and the formation of sex role concept in the adolescence are discussed.